



まつうら・かずお 1960年生まれ。環境問題に関心があったが、事件担当が長かった。大津総局での勤務は3度目となる。

関西リレーNOTE

大津総局

松浦 和夫記者

環境に関心 ビワマスから

KANSAI

みなさん、ビワマスをご存じですか。琵琶湖の固有種で、「琵琶湖の宝石」と呼ばれています。美味として知られ、私はビワマス丼が好きです。

ビワマスはサケの仲間。琵琶湖で2〜4年ほど過ごした後、10〜11月に生まれた川を遡上して産卵し、一生を終える。孵化した稚魚は翌年の5〜7月ごろに琵琶湖に下るとされている。

琵琶湖のシンボルともいえるビワマスに注目し、住民に河川環境への関心を持ってもらおうという取り組みが、滋賀県で広がっている。

野洲市を流れる家棟川・童子川・中ノ池川。かつて、ごみの投棄が絶えなかったとされる。2011年に住民や専門家らが川を掃除し、生物調査を実施した。すると、ビワマスがいることがわかった。

湖と川を行き来するビワマスの命の循環をサポートしようと、15年に市民団体や自治会、企業、行政、専門家がプロジェクトを始めた。

河床に砂利をまいて産卵場所をつくったり、高さ約3メートルの段差に仮設の魚道を設けたり。遡上するビワマスは徐々に増え、県は昨年3月にコンクリート製の常設の魚道を設置した。その結果、昨年秋季には20匹が魚道の上流に遡上したことが確認された。仮設の時は数匹程度だったといい、産卵場所を増やすことに成功した。

野洲市の川のほか、東近江市の愛知川漁協などが22年から愛知川の支流に、長浜市の市民団体が昨年、大浦川に仮設の魚道を設けている。

湧水を源に長浜市の中心市街地を流れる米川。ここでも長浜まちなか地域づくり連合会がビワマスに着目したプロジェクトを始めている。住民らが清掃して米川まつりなどのイベントを開いており、昨年秋季、市民らに目撃情報や映像の提供を呼びかける活動を始めた。美しい米川で、ビワマスとともに子どもたちが生き生きと遊ぶ風景をつくりたいという思いがある。

川やそこにすむ生物に関心を持ってもらう活動が、さらに広がることを願っている。



「琵琶湖の宝石」ビワマス 常設の魚道 20匹上った 野洲で確認の記事はこちら



ビワマスのために設置された魚道＝滋賀県野洲市